

## 天孫降臨「奄美を満喫する旅」

(記:石塚)

2008年11月7日～10日

参加者:K原、K、S田、U田、T代、T土、石塚(7名)

K原さんに「天孫降臨奄美版をしましょうよ」と提案したところ、「どうせ行くなら金土日月で、“観て、登って、走って、泳いで、魚釣って、黒糖焼酎飲んで、島唄聴いて、田中一村見て・島料理食べて、奄美を全て味わいつくす、そしてなおかつ低料金で”」そういう旅を計画してくれとメチャクチャな要求が突きつけられた。いろいろあって一年が過ぎた。言い出した以上何年経ってもやらねばならない。

奄美大島って？

知っているようで知らない人も多いのではないのでしょうか。鹿児島と沖縄の中間に位置する島々です。地理、歴史、文化、動物や植物を研究すればするほどおもしろい土地であることは確かですが、そんな小難しいことはやめにして、「奄美を全て楽しむ！」だけに焦点をあてて計画をつくることにした。

一つだけ清真人氏(近畿大学文芸学部)のガジュマルに関する記述を紹介して、奄美の自然をイメージしてもらいましょう。

“あのガジュマルの奇態さこそは奄美の自然と文化の、今もその基底に潜みつけているにちがいない南方的な古代性、その原始生命性の象徴だ、と。日本本土にいと、樹木はわれわれの意識の中では垂直で、しかも多くの場合円錐的な、またそうでなくても対称性を構成する図形のイメージのもとに括られている。<中略> 奄美の樹木はその全体的印象が奇怪だ。奇怪というのは、ひとつには、垂直に対しては横に横にと奔放に伸び広がる水平性が、対称性に対しては八行的であり迷走的なアムバー的な運動性が強力な要素として働いているからだ。<中略> こうした動物的植物性を、森の神のような威厳をもって象徴するのがガジュマルだ。地下に降りてゆく根はまた地表にも出て蛇のごとく地面を這い、ガジュマルの幹や枝は仙人の生やす神秘の白髭のようにいくつもの根をまだ空中にある段階から生やして地面へと垂らす。しかもその幹の成長はおよそ垂直的ではなく、奇怪に蛇行的で、その枝がりもまた恐ろしいほどに八行的で横へ横へと伸び、また引き返し曲がりくねって、その気ままさに遠慮がない。予想がつかないのだ。その曲がり方は。”(ニライ カナイより抜粋:海風社)

計画の作成ポイントを以下のように絞り込んだ。

観る:ホノホシ海岸、ヤドリ浜、加計呂麻の海、諸鈍のディオ並木、於齋の巨大ガジュマル、寅さん最後の地、リリーの家、島尾敏雄文学記念碑、金作原原生林、アママル岬 等等(案内は、加計呂麻島は林さん、ホノホシ、ヤドリ浜は斉藤さんをお願いする)

登る:奄美最高峰湯湾岳(694m)。加計呂麻を一望できる高地山。

走る:11月9日の加計呂麻ジョギング大会に参加。

泳ぐ:マングローブパークでカヤックに乗る。無人島で泳ぐ。

魚釣:加計呂麻の海でウルメ、カツオ、チヌ釣り。(渡さんをお願いする)

島唄聴いて黒糖焼酎飲む(森さん夫婦をお願いする)

田中一村:奄美パーク・田中一村記念館。

島料理:島の家庭料理(T山さんをお願いする)。鶏飯店へも行く。

低料金で:低価の航空券、ホテル、レンタカーはK原さんをお願いする。

これらを組み合わせ時間調整し友人と調整して、何とか出来上がった。

11月7日(金)伊丹発 奄美着 西郷隆盛島流しの地 ソテツ群生地 奄美フォレストパーク

旅行期間中の天気予報は曇りときどき雨で、青い空、蒼い海は期待薄だった。空港へついて携帯電話をみたら、友人たちから連絡が入っていた。T山さんは「最高の天気になってよかった! 昨夜は奄美は大荒れだったのよ」と。泉さんは「差し入れを準備した。どこに持っていったらいいのか」と。ありがたい。2人にお礼の電話と今後のことをお願いする。他の方々にもいよいよ奄美へ出発の旨連絡を入れる。

U田、S田、K原夫妻、T土、T代、今回のメンバー全員がそろっていよいよ奄美の旅行はスタートした。

大阪は曇りで肌寒い。停滞前線が屋久島付近を通っているのかそこをすぎると青い空と積乱雲に変わった。真夏の風景だ! 北海道は雪との便りが届いているのに。着陸態勢に入るまえに機内放送が現地の気温は29度と告げた! 大阪より10度も高い! 夏だ! さすが奄美だ! わが故郷だ。

着陸後K原さんがレンタカーを借りてくるまでの時間、女性達は空港前の庭に植えられたソテツやガジュマルやパナナを観てもう感激しきりである。野生的な奔放なソテツやガジュマルは空港を出ればすぐにも見られるのに。

フォレストパークのバンガローを目指してナビ設定したはずが、いろいろと道草! なんでも楽しみたいYMCCメンバー独特の行動力だ。

早速脱線して西郷さん島流しの地「龍郷」で、愛妻・愛加那さんと過ごした庵を訪ねる。6畳二間のわら葺きの質素な佇まい。

歴史を動かした西郷隆盛の短くもゆったりと時間がながれた時期であろう。しかし愛加那さんを思えば私にとってはあまり来たくない場所でもある。当然ながら英雄には輝きと陰がある。

T代さんはダイビングで奄美へは何度も来ているので、彼女のリードで、ソテツの群生地を回り、今夜の食材を買うスーパーへ寄る。夕暮れの奄美の西海岸をフォレストポリス目指して走る。大阪なら日はとっぴりと暮れている時間なのに明るい！そう大阪とは緯度・経度が違うので日暮れは1時間くらい遅い。夕焼けが海に映えるのを見たいのだが、連なる山影や、原生林が邪魔して見えない。フォレストパークが近くなり山道へ入ると暗さが増す。マテリアの滝の表示はあるが、音は聞こえるが、滝が見えない。そこは鬱蒼と茂っている原生林である。降りて歩く気にはなれない。ハブの恐怖が襲ってくるのだ。滝を断念して目的地を目指すが入口を見落としらしい。明日行く湯湾岳の近くまで来てしまった。今度は慎重にバック。ようやくフォレストパークへ着いた。管理人はにこやかに接してくれた。予定よりはるかに遅れているのに。済みません。

なんと、キャンプ場は我々だけ！ 丸ごと貸し切りだった。

バンガローは2階建てで一階は居間、キッチン、バスタイレ、バーベキューも出来るテラスが付いている。二階は寝室。ベッドがあり、寝具もそろっている。

もったいない。これで採算はとれるのだろうか？税金の無駄使いと言われぬだろうか？心配してしまう。

そう言われぬようにお客が来て欲しいと思う。反面この静けさが続いて欲しいとも思う。

スーパーで買ったトピンニヤ貝を肴にオリオンビールで乾杯！島の食材を入れた鍋料理を皆で食す。

木陰の上は南国の星がまたたいていた。本当にいい天気になった。明日も晴れるだろうか？

我々だけが占有しているフォレストパークの、贅沢な島の夜は更けていった。

## 11月8日(土)マテリアの滝 湯湾岳 マングローブパーク、カヤック体験 古仁屋 海上タクシー 加計呂麻島探検 於齋(島唄宴会)

### マテリアの滝

朝まず、昨日見過ごしたマテリアの滝に向かう。林道を下ったところにあった。大きな淵を持つ8m程の滝で水量は十分だ。周りは植生が本土とは違う。松、ヘゴ、クワズイモ、名も知らぬ草木。全てが動物的に感じられる植物である。本土と同じものでも大きさが違う！ そう奄美そのものが温室なのだ。

### 湯湾岳(奄美最高峰:694m)

昨夜下見(?)しているので登山口まではスムーズに行けた。山域は霧がかかっていた。少し肌寒く感じる。

登山口から山頂手前の神社まで木製の階段が整備されていた。湿気とコケのせいとその踏面がよく滑る。

神社には赤い鳥居があり、境内には神、仏、沖縄由来の何か・何がまつられていた。

まだ頂上では無いらしいのでそこから亜熱帯のジャングルの地道を登る。三角点があったので、山頂に至ったと思った。高さの表示が694mより低いのでおかしいなと思ったが、次の予定地への時間が気になるし霧も

濃くなってきた。一応そこが頂上と決めて降りることにした。(後日談:そこはやはり頂上ではなかったまだその先5分ほど歩かねばならない。次回の宿題)

### マングローブパーク、カヤック乗り

山頂からマングローブパークへは約一時間ほどかかる。道を間違えたりしながら下る。途中遅くなる旨の連絡を入れたいのだが携帯が繋がらない。下界は今日もいい天気だ。しかし南国の島国の天気は変わりやすい。晴れたと思うとすぐ降る。スコールのようにザーときてカラッと晴れる。マングローブパークに着いた時もそうだった。皆でオヒルギ、メヒル木の森に囲まれた汽水域をゆったりと下り、帰ってくる。マングローブという木はないようだ。水中に根を生やし増えて行く植物の総称らしい。艇上から「カワセミだあ！」とKさんが叫ぶ、運のいいことに天然記念物の瑠璃カケスも見ることが出来た。鳴き声は「ぎゃあ、ぎゃあ」と、聞かないほうがよかった。それもそのはずカラスの仲間なのだ。しかも絶滅種から削除されるという。増えているのだ！

水の中はボラ、チヌなどが観察できる。ゆっくり楽しみたいが次の目的地へ走らねばならない！

### 加計呂麻へ

古仁屋の海の駅へ直行。ここでは斉藤さんが待っていてくれた。レンタカーを預け昼食！K原さんは運転から解放されアルコール解禁となった。ビール！と海鮮丼！うまいがな！

ここから海上タクシーで加計呂麻島へ渡るのだが、その前に今夜と明日の食材を仕入れねばならない。泉さん夫妻が差し入れを持ってきた。黒糖焼酎、ビール、ジュース、黒砂糖菓子など・・・

海上タクシーを一時間以上待たせ、やっと出発！生間(イケンマ)まで15分。首を長くして、林さんがマイクロバスで待っていた。明日の加計呂麻ジョギング大会の準備をスポカして我々のために時間を割いてくれたのだ。加計呂麻を語ってはこの人の右に出るものはいない。

かつて、加計呂麻島は日本軍の秘密基地であった。そのためここに何があり、何が行われたのか島民でも知らないのだ。まず安脚場(あんきゃば)の砲台跡、弾薬庫を見て、次に寅さんの最終回のロケ地諸鈍へ走る。諸鈍にはディゴの並木があり毎年5月には樹一杯に赤い花を咲かす。それが遠い昔沖縄からの船の目印となっていたのだ。今、ディゴの下では老人たちが日がな海を見、焼酎を飲み、ときには三味線に興ずる。

今度は呑の浦へ走る。ここには震洋隊という海軍の特攻隊がいた(隊長は若き日の小説家島尾敏雄)である。人間魚雷の格納庫をみる。こんなので敵の戦艦に当たれというのか…

### 於齋の巨大ガジュマル

加計呂麻探検の最終地は友人渡さんの住む於齋である。

事前の打ち合わせでは魚つりのあと、巨大ガジュマルの下で夕食宴会だったのだが、朝の雨風で公民館に予定変更となった。奥様の案内でその巨大なガジュマルの樹を見に行く。冒頭の清氏の文章のようにガジュマルは縦横に奔放に伸びていた。女性たちは登り、ぶらさがり、わめき、子供になっていた。

### 島唄宴会

森さん夫婦が古仁屋から海上タクシーで、三味線と島料理の差し入れを持って仲間に入ってきた。

渡さん達が朝釣ったカツオ、ウルメの刺身に島料理、そしてYMメンバーのバーベキューが混ざり合って豪華な夕食、宴会が始まった。

島唄は「朝花節」から始まった。お客さんが来るとまず最初に歌われる節である。

#### “朝花節”

参(いも)しゃん人(ちゅう)ど 真実あらんな  
ハーレイ  
石原(いしわら)踏(く)みきち 参(いも)しゃん人(ちゅう)ど  
真実あらんな

\*「石のごろごろある道を歩きぬいて、ここまで来てくれた人だぞ 真実の心がなければ来ないよ」

森さんは、せっかくだから島唄のひとつでも覚えて帰ってくださいと、T代、T土嬢に「行きゅんにゃ加那節」の特訓が始まる。

#### “行きゅんにゃ加那節”

行(い)きゅんにゃ加那(かな) 吾(わ)きゃ事忘(くとわす)れて 行きゅんにゃ加那  
打(う)っ発(た)ちゃ 打っ発ちゃが 行き苦(ぐる)しゃ  
ソラ行き苦しや(ソラ行き苦しや)

\*行ってしまうのですか、愛しい人。私のことを忘れて行ってしまうのですか。いや発とう発とうとするが、あなたのことを思うと行きがたいのです

その後はカラオケ大会、下手な詩吟まで飛び出して、加計呂麻島於齋集落の公民館は大騒ぎとなった。住民の方々お騒がせして済みませんでした。

### 11月9日(日)於齋 海上タクシー与路島 古仁屋(ホノホシ海岸、高知山) 名瀬(登山邸)

今日は加計呂麻ジョギング大会の日。最初の計画はジョギング大会にも参加の予定であったが、観光を優先したいとの事でキャンセルし、加計呂麻島の南にある与路島へ渡ることにした。朝食の準備にかかった時、渡さんが「朝食を準備したから来てください」と誘いに来た。

皆恐縮しきりだが、好意にはこたえねばならない。彼のご自宅によばれることにした。ご飯に味噌汁、パパイヤ漬、パパイヤの熟した実などもデザートに頂いた。

彼は地元の水産高校を卒業後水産会社に入り世界の七つの海をまたにかけて生き抜いてきた。顔色は黒く輝き肉体はがっしりとしていかにもマグロ船に乗っていた！との風貌である。退職後、豪華な屋敷に犬を飼い、日曜大工を楽しみ、また気が向けばヨットで魚釣りに出かける。たまには内地にいる孫の顔を見るため出かけて行く。おだやかになるはずだ。人なつっこくなるはずだ。

### 与路島

海上タクシーで与路島へ渡る。栈橋はひっそりとして、ヒト一人いない。民宿もオフシーズンなのだろうか静かだ。集落の小道を奥へ奥へと歩く。珊瑚を積み重ねた塀にガジュマルの根が深く食い込み、ガジュマルとサンゴの石垣が一体化している。塀にはハブが出た時の護身用に「用心棒」が立て掛けられている。およそ10mおきに1本、時には数本。

この間、道ですれ違ったヒト二人、牛舎で働く男性一人。みな高齢者だ。加計呂麻の学校はみな小中学校がいっしょになっている小中一貫校だ。休校となっているところも多いと聞く。休校が何年か続くと廃校となる…

於齋に戻る途中にハンミヤ島という無人島がある。その横を通って観察。次ぎ来たときはキャンプしようかと思う。(旧実久村は小中単独で4つの小学校に2つの中学校がある)

昨夜の公民館に帰り、渡さんに瀬相まで送ってもらう。ここは加計呂麻マラソンのゴールになっていて丁度閉会式中。しかし、まだ走ってくる人の名を一人一人呼びながら島民が迎えている。何人かが私のところに寄ってきた。同級生だ！このマラソン大会に参加した旧友たちだった。来年は走ろうかな…などと余計な感情が湧き出てくる。迎えの海上タクシーが来た。名残り惜しいが加計呂麻の旅はここで終了。

ホノホシ海岸、ヤドリ浜、高地山

古仁屋に戻り、今度は斉藤さんの先導で奄美南東部のホノホシ海岸へ向かう。ここは太平洋からの荒波が直接打ち付ける場所です。いつも波が荒い。砂浜は流されて無い。波にかどをすり削られた丸い石がごろごろ鳴っている。ヤドリ浜は大島海峡の入口で白い浜が美しく海中はサンゴ礁が多くダイビングにはもってこいの場所である。皆泳ぎたそうだったが、寒いし、足をつけるだけで我慢した。名瀬へ向かう途中、高地山に登る。ここは加計呂麻島を一望できるので、昨日今日走り回った加計呂麻の最後の風景を楽しんだ。

豪華シマ料理(T山邸)

名瀬でホテルに入り、シャワー。T山邸を訪問する。

計画書の中にシマ料理(T山邸)とひっそりと入れておいた。気がついたヒトは「このトザン邸って何？有名な店？」と聞いてきたので、友人宅だとあまり説明しなかった。あまり友人にばかり頼っているので仲間が遠慮してしまうのを恐れたからだ。

ホノホシ海岸に向かう前に立ち寄った泉さんの土産店で、同級生のAさんに会った。

彼女は「今夜の食事の手伝のため、これから名瀬に行くのよ。」と耳打ちした。そういえば、昨夜、於齋でMH子さんも「明日夜名瀬で会いましょう」と言っていた。何か企んでいるな！T山嬢！

T山邸では、シマ料理のオンパレードで、圧巻は巨大な奄美の青く光る伊勢海老の造り。川海老のフライ、イラブチの刺身、島の高価な食材を盛りだくさんつかった豪華な料理だった。もう感謝感激である。ご主人のT山先生がよろこばせと挨拶して下さる。名瀬在住の同級生も集まっている！料理の説明を聞きながら写真を撮ったりメモったりしていたわが女性軍はそんなことより食べることに専念しだしていた。YMの皆さんが帰った後は同窓会となりながながとしゃべってしまった。T山先生はじめみなさんに何とお礼したらよいか…感謝のみ！

**11月10日(月)金作原 奄美パーク(田中一村記念美術館丹) 空港 伊丹空港**

K原さんが、「金作原は遠いのですか」と聞いてきた。フォレストパークより近いというと、地図を調べて、「これなら行ける！行こう！」と言う。彼は今後の事を考えているのだ。次回の奄美旅行のために出来るだけ多く調査しておきたいのだ。

田中一村記念館へ行く前に金作原へハンドルを切った。女性軍は土産店へ寄って、田中一村、と考えていたが方向が違うので意外そうだった。街中を脱出すると8人乗りのレンタカーがぎりぎりを通れる林道が続く。

そこはジェラシックパークの世界！ほとんど整備もされていない。他に誰もいない静寂の世界！

雨の中我々だけが、巨大なヘゴ、クワズイモ、名も知れぬ南方系の植物を呆然と見つめていた。

ここに来る時にはこの植物について説明できるようなヒトが付いてこないともったいない場所である。

下界へ戻り鶏飯店で昼食後、田中一村の絵に浸る。

中央の画壇には見向きもせず、地位も名誉も金も捨てて、自分の思うがままに、画のために画を描く！そんな生き様が大勢のヒトの共感を呼ぶのだろう。

疾風のごとく駆け抜けた奄美！

しかし疲れは無い！明日からまた都会の混雑したあの現実に戻るのだ。でも力が漲っている。この島の空気が、会って、話した人々の心の優しさが、力をくれたのだ。天孫降臨奄美の旅はこれで終了ではない。これから始まるのだ。

(後記)

冒頭に書いたように、小難しいことはやめにして「奄美を全て楽しむ！」計画を作った。奄美の美しい自然を観る、体感する…これだけでは不十分だ。何か物足りない。そう、人間である。今、奄美で現実に生活している人々を我々の旅の中に登場させたい！

同級生の方々に登場をお願いした。みなさん快く賛同頂きそれぞれの場面でいい役者を演じていただいた。いやいやハプニング続出であったというべきであろう。T山宅の豪華料理、同窓会、加計呂麻島、与路島、古仁屋で会って話し唄い遊んだこと皆様本当に有難うございました。

また行きます！